

令和2年度 第2回羽黒地域振興懇談会 会議概要

- 1 日 時 令和3年3月25日(木) 午後3時00分～午後5時00分
- 2 場 所 羽黒コミュニティセンター 集会室
- 3 出席者 委員 百瀬清昭委員、阿部良一委員、山本興治委員、榎本トヨ委員、榎本久紀委員、
田村廣実委員、堀誠委員、小林馨委員、加藤省二委員、星野博委員、
岡部辰則委員
羽黒庁舎 支所長 伊藤義明、総務企画課長 菅原青、市民福祉課長 佐藤美香、
産業建設課長 秋葉敏郎、総務企画課長補佐 観世安司、
総務企画専門員 藤澤弘子、総務企画課主事 三浦耀介
企画部 地域振興課地域振興専門員 本間育子

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 会長あいさつ 百瀬清昭 会長
- (3) 支所長あいさつ
- (4) 意見交換
 - ① 令和3年度まちづくり未来事業について
 - ② 人口減少対策について
- (5) その他
- (6) 閉会

5 会議資料

- (1) 令和3年度羽黒地域まちづくり未来事業一覧(資料1)
- (2) 「若者の就職・進学に関する意識調査」簡易集計結果(資料2)

6 意見交換の要旨

① 令和3年度まちづくり未来事業について(資料1により説明;総務企画課長、産業建設課長)

【小林馨委員】

前回の会議でも地域において鳥獣被害がかなり深刻な問題であるということをお話したが、近年、猪や熊の被害がかなり発生している。観光のまちということで、まちづくり未来事業の中でいろいろな事業が予定されているが、こういう身近な問題について何も触れていないことが気になっている。手向地区においても猪の被害がかなり出ており、未来につなげるという点においては、鳥獣被害対策に力を入れていただきたい。加えて、昨年12月25日に豚熱が発生したが、野生の猪が原因と思われる。羽黒には畜産農家はかなりあり、堆肥センターもあることから、万が一移動制限となれば、管内の堆肥供給に大きな影響が出る。このことは、地域農業や地域産業に関わる地域の問題として認識していただきたい。

また、猟友会には補助金が支出されてはいるが、免許を取得している人にとって、更新料や維持経費は負担となっている。中川代集落では独自に補助を出しているが、中山間に住んでいる者以外は関係ないというわけではなく、まちづくりという観点から経費負担についてあわせて考えていただきたい。

【産業建設課長】

鳥獣被害対応については、全市的な対応となっているため、未来事業には入っていない。猟

友会による捕獲実績を言うと、令和2年度ツキノワグマが7頭、猪が15頭で、令和元年度がそれぞれ2頭ずつだったのでかなり増えている。猟友会には、狩猟免許の取得事業への支援や鳥獣防止地域活動支援事業ということで地域での取り組みを応援している。手向地区からは捕獲組織を結成したいという相談もあり、現在対応を検討しているところである。

【小林馨委員】

取組については十分承知しているが、猟友会に補助金を出しているだけでは、個人の免許更新ができない状況であることを理解していただきたい。これからは若い人たちの力が必要なので、未来を冠する事業であるならば、若い人たちが継続してできるような体制について配慮をお願いしたいということである。

【岡部辰則委員】

松ヶ岡が開墾150年となり、またワイナリーもできたことから、松ヶ岡にさらに観光客が来ることを期待する。子どもたちに継承していけるような事業をお願いしたい。

【星野博委員】

看板設置事業について、羽黒山バイパスが開通したが、そこにあるいでは文化記念館の古い看板は撤去するのか。

【産業建設課長】

この事業は2年計画としており、当該看板は大きく費用がかかるため、来年度実施する予定としている。

【星野博委員】

間違った矢印が表示してあるので、なるべく早くしていただきたい。

【産業建設課長】

承知している。県道沿いなので看板を立てにくいということもあるが、今年も臨時的に案内看板を取り付けて対応したい。

【加藤省二委員】

昨年、このまちづくり未来事業の補助金で実施予定であった羽黒山石段マラソン全国大会は、コロナ禍で開催できず中止した。羽黒山バイパスが開通し、今年はコロナ禍の中でどうしたらできるか検討してきたが、現在中止の方向で動いている。

また、昨年はコロナ禍にもかかわらず、羽黒山では年末に多くの人出があった。現在も収束していない中で、どのような密にならない対策を実施し、集客を図っていくのが大切である。羽黒地域の飲食店、小売店に関しては、賑わっているところもあるが、かなり疲弊している状況である。対策をきちんと行って事業を進めていただきたい。

【堀誠委員】

松ヶ岡開墾150年に関しては、集落の実行委員会でも事業を計画しているが、コロナが様々なところで足枷となり苦労している。未来に向けてということでは、子どもたちに視点をあて、どういった事業が子どもたちのためになるのか、未来に残せるかといった視点で事業を考えている。開墾の歴史などを学ぶ取り組みや、未来に負担を残さないための取り組みというこ

とで、子どもたちと一緒に里山を整備する事業を記念事業の中に入れていく。

資料のまちづくり未来事業の中で、羽黒地域「ブルーベリーの里」づくりプロジェクト事業があるが、ブルーベリー事業に取り組んでいる農家への支援なのか、観光も兼ねたブルーベリーの里づくりなのか、具体的な支援内容を伺いたい。

【産業建設課長】

基本的には、庄内たがわ農協ブルーベリー部会への補助金を考えており、生産農家への支援という形になる。内容については、説明の繰り返しになるが、一点目が「ブルーベリーの里」づくりのプラン作成への補助、これには意見交換会や視察も含まれる。二点目がブランド力強化で、パンフレット作成や化粧箱製作への支援、三点目が収穫時の労働力の確保に向けて、サポーターづくりや手伝いの募集等を支援するものである。

【榎本久紀委員】

ブルーベリーの適期収穫時の労働力の確保ということで、確保が難しいとすれば、シルバー人材センターとの連携を強めることも検討したらどうか。

【産業建設課長】

案として検討する。

【山本興治委員】

鶴岡市では多くの団体で百歳体操に取り組んでいるが、高齢者が体操することで元気になって、地域づくりや集落づくりに参加するような形になればと期待している。

また、旧羽黒第一小学校の統廃合時に、廃校利用の先進地を視察し、その中で地域おこし協力隊についても聞いたが、この協力隊について、地域づくりに参画していただく方法を羽黒地域として考えてほしい。

さらに、歴史まちづくり事業について、以前高谷先生がこられて、桜小路の辺の電柱を地中化して景観を高めるといふ話があり、視察でも見てきた。歴まち事業は来年で終わるのか、電柱地中化や裏通りを回すという構想はもうなくなったのか伺いたい。

【市民福祉課長】

地域活動センター4箇所のほかに、集落単位での実施を含めると、羽黒地域では現在11団体が百歳体操を実施している。また、松ヶ岡開墾150年の記念事業として、ゆぼかで体操を行い、松ヶ岡まで歩くというウォーキング事業を計画しており、元気な高齢者を増やしていきたいと考えている。

【総務企画課長】

廃校利用にかかわる地域協力隊については、鶴岡市では温海の福栄地区などでやっているが、地域の中に入り、一緒に生活を始めてから、次に何をしようか考えるとなると大変になるので、事前に何をしてもらうかをきちんと考えておく必要がある。

また、歴まち計画は、令和4年度までの計画期間となっているが、電線の地中化は費用がかかるので、優先してやり易く、なおかつ電線地中化ほど費用がかからない修景整備の方に注力してきたという経過がある。この修景整備事業は令和3年度までとなっているが、これまで25件を実施し、令和3年度は9件の整備を予定している。門前町のまちなみは、修景整備をした建物が集積することでできてくるので、翌年度以降の対応については、地域の声を聞きながら考えたい。

【田村廣実委員】

手向地区としても要望書を出しているが、この地区は県内でも一大観光地にもかかわらず、道路のアスファルトが非常にみすぼらしい。今までは部分的な修復工事をやっていたが、オーバーレイ工事をやるということを知った。まちづくり未来事業に載っていないということは、一般事業としてやるということか伺いたい。あわせて、ドットラインやセンターラインをひいて、交通安全に注意している観光地だというイメージを、ここを訪れる観光客に植え付けていきたい。

2点目であるが、大鳥居周辺花いっぱい事業について、新規事業ではないようだが、既存事業としてやっていた事業なのか伺いたい。

【産業建設課長】

手向地内の道路がパッチワークのようになっているところを、全部剥いで舗装し直すオーバーレイ工事は、まちづくり未来事業ではなく、産業建設課の予算でやっている。今年度もやっており、少し時間のかかる話であるが、今後もオーバーレイ工事を実施していきたい。

また、大鳥居周辺花いっぱい事業に関しては、十文字の交差点のところで実施しているもので、名称が大鳥居周辺に変わっただけで中身は同じである。

【田村廣実委員】

名称変更ということで承知した。なお、大鳥居から十文字までの間を観光シーズンに通ると、草はぼうぼうと生え、木は伸び放題である。ぜひともシーズン前に県に要望し、きれいにしてほしい。

【産業建設課長】

特に今年は東北DCで訪れる方が多くなるので、県に要望していきたい。

【阿部良一委員】

前々からの話だが、私の家の脇に筍沢温泉の方に行く看板があり、かわいそうになるくらい入って行く車がある。カーナビが誘導しているのでどうしようもないとは思いますが、先ほど看板の話があったので、機会があれば解決してほしい。

【産業建設課長】

看板設置等の予算は、羽黒バイパスが開通したことから予算化された状況ではあるが、筍沢温泉が廃業してからもそちらに入っていく車があるということで、誰が建てたものか調べてから対応を検討する。

【榎本トヨ委員】

先ほど、堀委員から子どもたちの未来につながる里山整備のことを聞き、そのような子どもたちを育てていけば、きっと地元に残ってこの地域を守っていこうという気持ちになるかもしれないと感じた。

② 人口減少対策について（資料2により説明；総務企画課長補佐）

【百瀬清昭会長】

このアンケートは、Uターンしたときに日本学生支援機構などの奨学金の助成をすることを

前提としたアンケートと感じていたがどうか。

【総務企画課課長補佐】

設問の中にそういう内容があり、それに向けてという意味も含まれていたと思う。本日は、このような制度が必要あるいは不要というご意見を含め、何でも結構なので人口減少対策につながるご意見をいただきたい。

【百瀬清昭会長】

県内の高校3年生の転出率が一番高いのが庄内地区で、約60%が18歳になると出ていく。これは県内4ブロックの中で一番高い。若い人から残ってもらう、あるいはUターンしてもらうということで、それが人口減少対策になっていく。非常に膨大なアンケート結果ではあるが、様々な観点からご意見をいただければありがたい。

【岡部辰則委員】

進学したい人は県外に行くという感覚はあるし、都会への憧れがあるので、一度は地元から出てみたいという気持ちは、私もあったし、今の人もそうだと思う。アンケートを見ると、積極的な理由で地元に戻りたいというよりは、消極的な理由が大きいように感じる。鶴岡に来たら楽しい生活があるとか、鶴岡にいた方が都会より充実した生活が送れるとか、そのような意識が芽生える鶴岡市になればよいと思う。例えば、若い人が鶴岡で新しい事業にチャレンジできるような補助制度があればそれを広くアピールし、地元にいる学生に鶴岡市にこういう制度があるということを教えることが大切である。

学校統合をした広瀬小学校であるが、来年度新入生は18人と聞いており、子どもが減っていると感じている。若い人から戻ってきてもらうことも重要だが、子どもを産んで生活しやすい環境を整えることもかなり重要であり、特に冬期間に子どもが遊ぶ所がないので、遊べる場所を作っただけならば、子育てしやすい環境になると思う。

【星野博委員】

今日から東北DCキャンペーンのCMが流れているが、宮城、山形のコロナ感染の状況で、仙台での出発式、開会式が中止となった。今後どういう方向となるのか注視し、模索していかなければならないという状況である。

手向は観光地ということで、著名な先生がやってくるが、手向において元気な人たち、つまり観光関係や御山を信じる信仰関係の人たちから呼ばれてやってくる。先生たちは、元気なところしか見えていないようで、口をそろえて、観光が活性化すれば地域が潤い、地域振興につながるというが、手向において、観光や信仰に携わる人たちとそうでない人たちとの比率は3:7くらいで一般の人たちの方が多い。そういう中で、今の若い人たちに松例祭に入りなさいと言っても、若い人は入らないらしい。私の世代の人間は、生まれながらにして氏子として育ち、そういう思いでお祭りに奉仕したが、今の若い人たちはそういう感覚がない。彼らは、私が小学校の総合学習に行き、地元のことを一緒に勉強した子たちではあるが、それでもそのような抵抗感がある。仮に、観光や信仰に携わる人とそれ以外の人に強弱をつけると、関われない人は弱者になって、手向にいても仕方ない、早く手向から脱出したいになってしまう。自治振興会会長の勝木さんが2040年には手向は120軒になると算段したが、その中には手向から出たいという人は入っていないはずで、それを計算に入れると2040年にはもっと

少なくなってしまう、結局、観光関係、信仰関係の人たちだけが手向に残ることになる。私は観光協会の職を退くが、ここで生まれ、ここで育ち、ここで還暦を迎え、そして原点に戻ってみると、観光や信仰に携わっていない人たちのことがずっと気になっている。そんなものは関係ないという人もいるが、黙っていれば、ますます人口減少が進んでいくので、ここでストップさせる算段を今後若い人たちと一緒に考えていこうと思っている。

【田村廣実委員】

この調査が2019年、令和元年の実施ということで、今このコロナ禍の中で調査をしたら、多少違った結果が出てくると思う。自分の過去を振り返ると、一度は賑やかなところに行ってみたい、一人暮らしをしてみたいという憧れがあり東京の大学に行ったが、ここは私が住むところでないと感じたことに加え、またこの出羽三山の元で育ったので、魅力的で離れがたい地域だという思いがあって帰ってきた。若い人が戻ってこない理由としては、将来的に生活、生業ができないというところが一番大きいのではないか。先端研は世界に誇る研究所だが、そのような機関が集まり、鶴岡市の名を高めていけば、若い人たちも戻ってくると思う。

なお、私が調べたところ、手向地区全体で今年度より11世帯少なくなるようで、残念ながら、これがさらに進んでいくものと感じている。

【榎本トヨ委員】

若い子たちは東京に行きたい、東京の大学に行きたいと聞いているが、その子たちが帰ってくるかは、どのようにして親の後ろ姿を見て育ったか、家族がどうやって育てたかということにつながると思う。ただ、子どもが地元に残らない家庭でも、よそで生活しながら、インターネットで画面を通してながら親の様子を見たり、接したりという方法もあるとも思う。集落の中には、いずれは帰ってくるという家庭もあるようだが、親や家族の暖かさをどこにいるときも忘れずにいてくれればよいと思う。

【阿部良一委員】

今も昔も、江戸や東京という面白いところには行くのは無理もないことと思う。庄内は災害の少なく、雪の多い冬以外は住みやすく魅力的なところだが、楽しく過ごすとなると少し違う。自分の子どもに対しては、地元に残るようには言わずに、どちらかといえば外に行けと接してきた。幸か不幸か地元に戻ってきて、親として安心ではあるが、地元縛りという気持ちはなく、楽しい人生になってくれればそれでよいと思っている。

私もお祭りごとに携わっているが、価値観が多様化しているので、人を集めるには魅力的なものがあるということに尽きるのではないのかと感じている。持続可能な社会ということで、例えば手向では、宿坊は親から子、子から孫と生業が何百年も続いてきたが、残念ながらこれも難しくなっている。社会の在り様が大きく変わってきているので、人の動きの変化を捉えていかないといけない。少子高齢化は進んでいるが、世界には人がいるし、人の力で維持していくということしかない。

【山本興治委員】

今はテレワークができて、東京の会社に勤めながら好きなところで生活できるので、例えば

鶴岡地域にある空き家を無料で貸すというキャンペーンをするのは一つの方法である。しかしながら、周囲に聞くと、少子化に苦勞して逆らう必要はなく、地元で暮らしている人が元気で生活していればそれでいいのだという意見もある。

また、子どもの教育について、堀委員、岡部委員から話があったが、資料の中に松ヶ岡のお茶再生プロジェクトというものがあり、私も松ヶ岡とお茶の関係を以前に調べたことがある。松ヶ岡の歴史だけでなく、地域の歴史も教えて、子どもに地域に対する愛着の気持ちを植え付けることも将来への先行投資と思う。

【榎本久紀委員】

女性、特に子育て中の女性が集まると、子育てしやすい町の話になり、庄内町や三川町から鶴岡負けているという話がよく出る。子育てしやすいまちづくりは非常に重要だと思うので、今回のアンケート結果も参考にしながら、これから少子高齢化対策を含めて地域づくりをしていきたい。

【堀誠委員】

地元に戻ってくるだけでは生活できるわけではないので、小さい自治体がどうしたら戻ってくるかと考えても容易なことではない。国の施策でも、過去行政機関の分散という話があったが、魅力ある地域をつくり、そこで生活できるような国土にするというのであれば、国が表に立って施策を実行しないとイケない。多様性ということは、それぞれの考えで生きていくということなのかもしれないが、やはり子どもたちが少ないと賑やかでないし、楽しくない。そういう地域をどうやって作っていくかということは非常に難しい問題である。

【加藤省二委員】

アンケートを見て、その内容が何十年前にとったものと似た結果だと感じた。羽黒地域の商工業は2代目がいないところが多く、父親と同じような仕事をしていても都会で働いているということが結構あるので、これを何とかできればよいと考える。また、地元就職を希望しない理由の中に、希望職種がなさそうだから、給料が安そうだから、大手企業がないからなどいろいろな意見が出ているが、給料が高ければ鶴岡に帰ってくるのかというとそうではなく、都会へのあこがれが大きい中で、そのまま都会に住み着いているのだと思う。これに加えて、進路決定に影響することについては、進学でも就職でも、親や家族、親戚の話ということが大きく、大人の方でも都会がよいといっているのかと気になった。いろいろな対策はあるが、進学支援や企業誘致をして人が来るのかという疑問はある。人口を増やすには、よそから連れてくるしかないと思う。多くはないかもしれないが、県外から移住してきた人たちもいるし、やはり魅力あるまちづくりをしなければならない。全国どこに住んでいても、お祭りの時だけは地元に戻るといふ地域もある。ものがよければよそから人が来るので、そういった施策をしなければいけないと考えている。

【小林馨委員】

地域コミュニティが活発でないと、若い人が輪に入ってくる環境づくりが薄れてしまう。ここに住んでいる人が元気でないと、新しい人を呼び込むことは難しいので、いかに元気を出せ

るかが大切なことと考えている。各集落で自らの集落を盛り上げる施策を考えていかなければならない。

【田村廣実委員】

Iターンしている方を何人か知っているが、鶴岡市ではそのような移住関係の統計をとっているか。

【地域振興課地域振興専門員】

鶴岡市では、市内の転居や県内の他市町村からの転入などは移住には該当させておらず、県外からの転入者を移住者としているので、委員が思っているイメージと同じではないかもしれない。転入者からアンケートでは、どこから来たか、どういう世帯状況か、どういう理由で来たかというデータはとっているが、どういったところが魅力かといった心情的なところは聞いていなかったと思う。地域振興課にも鶴岡へのUターンやIターンの相談があるが、外から見た鶴岡の姿と実際の生活での違いはあるので、受入体制、雪や仕事の問題などの対策をしないとミスマッチが起こり得ると考えている。

【百瀬清昭会長】

鶴岡には移住定住してきた人のネットワークがあり、家族を交えて、年に何回か交流会や行事をしているようだが、その部分を教えてほしい。

【地域振興課地域振興専門員】

移住者交流会については、地域振興課の方で最初だけ音頭取りをする形で、その後は、交流会に参加している人たちが実行委員となって企画運営をしている。その中でも雪道の運転に関する講習に関心が高いようである。

【百瀬清昭会長】

外から見た魅力とこちらに来て体感している魅力には差がある。外からは、月山、鳥海山、出羽三山がすばらしく、食文化や先端産業もあるといったよいところが目立つので、鶴岡は住みたいランキングが非常に高い。それで来てみたら、雪でたまげる。今年よそから鶴岡に来た人たちは、特に雪が多かったので、鶴岡のよいところと悪いところを両方経験できてよかったと思うし、今の若い人はSNSを使い、例えば首都圏の人に情報を流すネットワークを持っているので、地元の間が楽しく生き生きしている姿など生の情報が流れていくことを期待している。

【阿部良一委員】

やはり魅力が大事であり、ここにはその魅力はごろごろある。それをきちんと発信することができて、きちんと受け止めてもらえれば、本当によくなると思う。就職に関しても、よいところを声高らかに流していけば、帰ってくる人も増えると思うし、持っているものを当たり前と思わず、声高に流せば、もっと人は来てくれる。

【百瀬清昭会長】

創造的過疎という言葉を使っている人がいるが、人口が徐々に減るのは仕方ないことではあるが、前向きに取り組み、なだらかに進んでいくことができればよいのだと思う。全国を見れば、若い人が移住し、人口が増えているところも田舎の方にはあるので、そういう事例を学び、地域づくりに取り組んでいただきたい。